

No. 1094

新春の天皇ご一家

新春のやわらかい日射しに包まれた皇居。昭和50年、天皇ご一家はおそろいで新年を迎えられました。昨年の夏、浩宮さまがニュージー・ランドを訪問された時のアルバムに見入られる天皇・皇后両陛下。紀宮さまに誘われて庭園へ、今年73才になられる天皇陛下はますます御元気。皇太子ご夫妻の愛情を一身に受けて、すこやかに成長される浩宮さま、礼宮さま、紀宮さま、新春の天皇ご一家です。

えと創り

—富士五湖窯—

土を練りロクロを廻しそこに形を創り上げていく。土を焼き焙を見つめそこに陶芸の魂をみつめていく陶工達。富士のふところにいだかれて窯がある。山梨県河口湖町、富士五湖窯。今まで富士山の土で陶器はできないといわれていた。しかし若き陶芸家達が京都清水焼きの窯元から教えを乞い10年前に富士の土で焼きものをつくりあげることに成功した。そして、この10年の間、五湖焼きの名で壺や茶器など様々の陶器が焼きあげられていった。今、彼等は特別注文のうさぎのつがいにとりかゝる。つくりあげてはつぶつぶしては又成形にとりかかる。もうこれで4度目だ。えとにちなんで、小さなうさぎの注文も舞い込んだ。石こうでつくった型に粘土をつめ、うさぎの原型をつくる。うさぎのデザインを考え石こうで型をとるのに1ヶ月もの時間を費いやしたという彼女。次第に形がつくられていく。いかにうさぎの毛なみのやわらかさ耳や体のふくらみをつくりあげていくか。土と手の耐ゆまぬ動き、それを見つめる陶工の眼寒さを忘れて時が過ぎる。耳をつけ鉛筆で眼鼻びげを彫り刻んでいく。乾燥させ素焼きしたものに色をつけていく。一匹のうさぎが土から練られ形を整えられ乾燥させ、素焼きされ色つけ、上薬りを塗り本焼きの窯に入れられるまで一週間以上かかるという。外はすっかり陽が落ちた。土は焙に焼かれ陶工の魂を吹きこまれて陶芸品にかわる。1250度の高温で10時間。生きていまにもとびはねようとするうさぎがそこにある。